流域の景観形成考える

ゆめ会議　飯島で天竜川シンポ

NPO法人天竜川ゆめ会議（福澤浩代表理事）は18日、「豊かな自然を大切にし、地域の特性を生かした景観の創出」をテーマとした天竜川シンポジウムを飯島町文化館で開いた。現地見学を踏まえ、基調講演や討論で景観づくりの着目点と留意点を拾い出し、住民と行政が協働で取り組む天竜川流域の景観形成の方向を考えた。

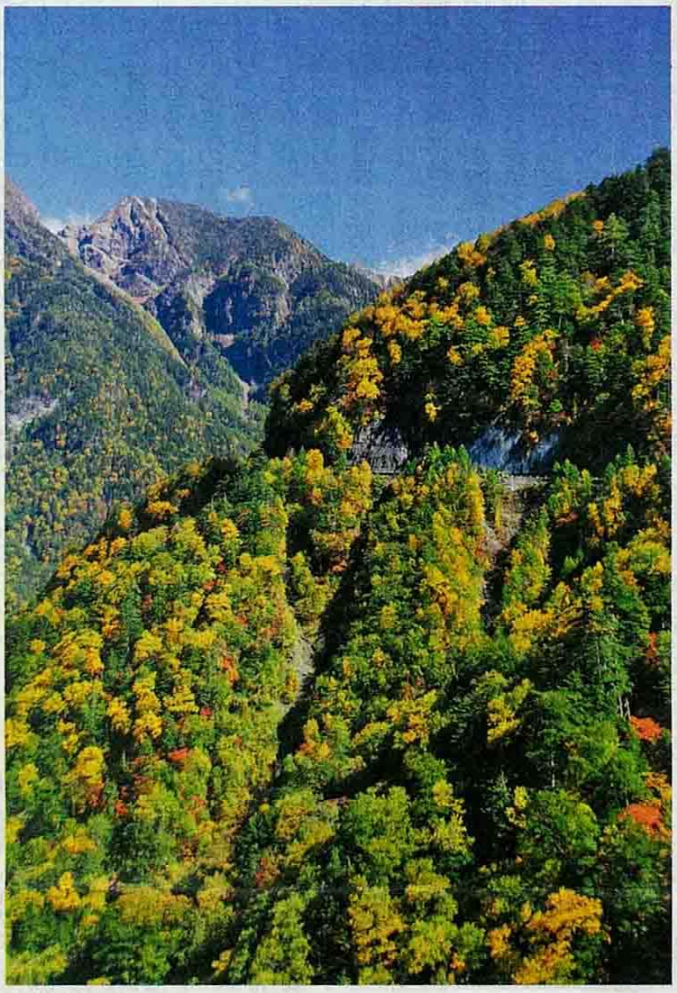
シンポジウムは県の地域発元気づくり支援金を活用し、行政も交えて官民一体で計画した。自然環境や景観に関心がある人たち、川づくりに関わる行政の担当者や事業者、研究者ら約150人が参加した。

午前中の現地見学では、駒ケ根高原の太田切川床固工群と中川村の天竜川に架かる坂戸橋を視察。人工構造物が、機能を果たしながら河川景観を作り上げている様子を確かめた。午後は報告や基調講演を聴講した。

早稲田大学創造理工学部の佐々木葉教授は「川の風景からまなぶこと」をテーマに基調講演。「これからのまちづくりを考えるときに、どうやって川や水路と人間が付き合っていけるのかを考えるといい」と提起すると、街と水辺をつなぐ護岸整備や人が利用することによってできる川の風景、先人たちの治水の知恵を再現して居心地のよい水辺空間を整備した事例を紹介した。

「産業のために人と川は接点をもっていたが、その機能を失っていった。いま、再び人のための水辺整備へ向かっている」とも指摘。「人との接点を、風景の中でどうつくっていくか。水が美しく、そこには生き物がいるというのが全ての川の魅力になる。そして川へのまなざしがさまざまであるように、常に多様で多彩な関わりがあるということだ」とまとめていた。（倉田高志）

太田切川のこまくさ橋から、床固工群の現場を見学する参加者



見頃を迎えた南アルプス林道から見られる紅葉

2014.10.19 長野日報(1面左上)